

「ご意見紹介」

もう10年以上にわたって自衛隊への体験入隊や研修に積極的に参加されておられる大阪防衛協会女性部・森田 芳子さんから、次のようなご意見を送っていただきました。ご紹介させていただきます。

「これからの自衛隊について思うこと」

大阪防衛協会女性部 森田 芳子（2014・3・16）

昨年末から今年にかけて、いろんな所でメッキがはがれまくってビックリの連続です。

関西ホールディング・グループから発表されたメニューの表示偽装は、関西人をとてもがっかりさせました。子供の頃から、阪急デパートでの買い物やレストランでの御招かれには、服装もお行儀も三割増しの良い子でなければならぬと親に言い聞かされておりました。年頃になれば、阪急系列のホテルでの結婚式&披露宴に憧れ、エンゲージリングと引き出物も「阪急がエエわぁ」と秘かに決意しているのが、典型的な関西お嬢です。

ま～、裏切られたわね。

しかも、責任者は記者会見で「知らなかった」と現場に責任をなすりつけました。世間か納得しないと分かると、料理長に会見で釈明させました。

「なんや、アレ」あきれ返った大阪人の反応です。

どんな偽装がされていたか、責任者が詳しく知らなくても、明確な上の意向が有るから、現場は品質を偽って表示したはずです。材料が高くて安くても、調理の手間か同じなら、わざわざお客をだます必要は無いのに、責任者の利益追求が、現場を偽装せざるを得ない形に仕向けていたのでしょう・・・そんなことぐらい、丸わかりなんじゃ！

信頼が大きければ大きいほど、裏切られた時の失望は大変です。そんな店が大好きだった自分の見る目の無さが恥ずかしく、大切な贈り物を届けた先方にも恥をかいた。口惜しさと怒りに恨みつらみが加わってホント、エライことに。

目先の利益を優先して会社のブランドを傷つけた責任者は、創業以来の先人の努力を台無しにただけではなく、会社の将来を担う人達に、お客様の信頼を回復するという重い責任を背負わせたのです。

そして、それよりずっと私達を呆れさせたのは、韓国と中国の態度です。

特に、南スーダンで国連平和維持活動に参加している自衛隊が、韓国軍の要請で銃弾1万発を無償提供したのに、韓国は礼の一言もないどころか「政治利用だ」とか「余計なお節介だ」など、ののしりと非難を日本に浴びせた件には、怒りを通り越して憐みを感じました。危険な外国の地域で活動している国民（国務でそこにいる人達だ）が助けを求めた事に快く対応した自衛隊、それを支持した日本に対して、そーゆー態度ってアリ？

韓国は、そういう国かね。

あのね～、どんなに仲が悪くても普通、助けて貰ったら「あ、すみませんなあ・・・」くらいの態度はするのよ。もともと、十分な用意をしていれば、そんな要請はせずに済んだでしょうに。誰がケチったの？

最近、中国・韓国の日本批判&反日キャンペーンのヒドさは度を越しています。事あるごとの嫌がらせや周囲に悪口を言いふらすなど、ご近所トラブルそっくりです。報道で有名になったクレマーオバハンが布団を叩いて「引っ越し～！」とわめいていたけど、国は引っ越し出来ません。それに私達は、中国や韓国の為に生きているんじゃないもの。

最近話題の『蝸の記』（葉室麟著 祥伝社文庫）にはこうあります。

「あの者は曲がったことができぬ。武士として、まっとうな生き方をしておる。わが家は先祖が御家の争いにより、流罪に落とされた。それゆえ、わしは策をめぐらし、はかりごとを用

いて用心頭まで昇った。しかし、それより上の段につきたくば、武士として恥じぬ生き方をせねばならぬと気がついたのだ」

日本が国際社会で「それより上の段」を望むなら、中国や韓国に安易な譲歩や遠慮をせず、きっちり対処することが「まっとうな生き方」なのだと思います。安倍首相が靖国神社を参拝されたことも、極めてまっとうなことです。

終戦後、靖国神社を焼き払おうとしたGHQは、駐日ローマ法王庁バチカン公使代理のブルーノ・ビッテル神父の「いかなる国家も、その国家のために死んだ人々に対して敬意を払う権利と義務がある」という進言により思い止まったそうです。(週刊新潮グラビア「蒼穹から」第二回)

一部上場企業財務部の元OLとして靖国神社について思うことを申します。

靖国神社に祀られておられる方達は、例えて言えば「日本という会社に自分の命で出資して下さった株主」です。そんな方達への決算期の収支明細、総会での業績報告は、企業として欠かしてはならぬもの。会社における当然の義務です。

国家、そして私達の為に命を捧げてくれた人達が祀られている靖国神社を、国民の代表である内閣総理大臣が参拝するのは当たり前だし、それこそやらなきゃ変です。

「外交関係が悪化する」という評論家やマスコミの非難にもかかわらず、安倍首相の支持率が相変わらず高いのは、まっとうであることと共に「こころざし」が感じられるからでしょう。

ついでに特定情報保護法について。

会社にもマル秘はあります。いねば会社のプライバシーですが、個人情報保護が大事だと言う人達ほど、国家の情報は保護してはいけないと言っているような気がします。国にプライバシーが有ってはいけないんですか？

ヨソの国には有っても構わない。でも、我が国はダメって、変じゃないですか？

その人達が、自分のプライバシーを全て開示するなら分かるけど、そーゆー一人に限って「ワタシは別」ですよね。責任持って範を示してくれなきゃ、とても信用出来ません。

葉室麟さんの『潮鳴り』の主人公は「落ちた花をもう一度咲かせたい」と努力します。

「高望みかも知れませんが、二度目に咲く花は、きっと美しかろうと存じます。最初の花はその美しさも知らず漫然と咲きますが、二度目の花は苦しみや悲しみを乗り越え、かくありたいと願って咲くからでございます」

安倍首相の姿勢にソックリだと思います。

そしてこの文章そのまま「二度目の花」を見事に咲かせたのが自衛隊です。

様々な災害における救難活動、国際支援活動で自衛隊は国内でも海外でも、大きな信頼を勝ち得ました。自衛隊の的確で迅速な活動と、自衛官一人一人の勇敢で誠実な行動は、被災した人々だけではなく私達国民を救い、大きな感動を与えてくれました。

それは自衛隊創設以来、所属された歴代自衛官の方達と現役自衛官の皆様、全員の努力が結実したものだと思います。

自衛隊の至誠と国民の感謝で咲いた花は、とても美しいです。

これまで、理不尽な非難と中傷など困難も沢山有ったと伺います。それにも負けずに、自衛隊はどうやってこの花を咲かせたのでしょうか。

それは「仲間を信じる力」を自衛隊の方達が持っているからだと思います。

自衛隊の結束の固さ、信頼の厚さは大変なものですが、それと共に「先達から受け継ぎ、次代に引き継ぐこと」をしっかりと自覚しているからではないでしょうか。

「先輩から受け継いだものを、自分達がもっと良いものにして、後輩に手渡したい」。これは日本人の自然な感情ですが、組織に限らず、国家と国民の連続性が無い所には芽生えない思いで

す。

反日キャンペーンに奔走する中国、韓国には、連続性のない国の不幸がハッキリと現れています。今、手にしている有効なカードを振りまわすだけで、決して次代の為に進もうとはしません。大きな問題になっている大気汚染について、中国の男性は、春節の花火を見ながらインタビューにこう答えていました。「私達の世代はもう仕方がない。次の世代で解決されることを願っている」・・・なんて無責任なんですよ。

自分は我慢しても、後に続く子供達やそのまた先の子孫たちに少しでも良いものを残したいと思ひ、つらくても一歩でも前に進もうとするのが日本人です。先祖もそうして来たと確信しているし、子孫達もきっとそうすると信じられる。それが日本人の連続性だと思うのです。

その思いを一番ハッキリ感じられるところが靖国神社です。

そこに祀られている方達は、自分の命を捧げて国を守り、私達に未来を手渡してくれました。これほどの信頼があるでしょうか。そんなにして貰ったら、きちんと応えなきゃ。参拝くらい、当然でしょ。

『熱風』二〇一三年十月号の「宮崎駿監督 引退会見」で宮崎監督が、「この世は生きるに値する」、「力を尽くせ」という大きなメッセージを語りましたが、今の若い人に伝わっていません。汗をかく事もせず、考えもしない「ひ弱な若者」は今、けっこう多くなっており、このような怠け者には、この世が生きる価値のあるものとは思えないでしょうね。

だから、自衛隊の皆様に期待します。

自衛官の誠実さ、全力を尽くして任務にあたる頼もしさは、被災した人々だけではなく私達国民をどれだけ力づけてくれたでしょう。

個人の強さだけではなく、組織としての自衛隊の、ブレない芯の強さは若者の心をはっきりつかんでいます。

大津駐屯地の創立記念日行事で新隊員が初めて観開式に臨む様子を拝見すれば一目で分かります。そこには自衛官の自覚と、将来への希望を持つ自分を家族や観客に披露する喜びと、助け合い信頼する仲間を得た自信に満ち溢れた誇り高い姿があります。

自衛隊の教官をはじめとする先輩や上司、仲間たち、そして自分に続く後輩たち・・・

自分はこの繋がりの中にしっかりとあると実感できたら、暗闇に行くのも怖くないでしょう。

自衛隊の規模と人数を増やす事はもちろんですが、自衛官経験者の就職には、そのキャリアを評価する企業が増えれば、もっと多くの若者が自衛隊を志望出来ると思います。

そしてもう一つ私達が期待するのは、自衛隊に日本を代表して貰うことです。

国際救難活動が任務の一つになった自衛隊。世界には、初めて見た日本人は自衛官だと言う人達も多いでしょう。自衛隊は、名実ともに日本の代表なのです。国民である私達も、自衛隊への支援を約束します。しっかりやって下さい。

強く、賢く頼もしくあれ。国民は自衛隊と自衛官の皆様にそう望みます。

心齋橋筋商店街にある西川ビルの壁面には「1566」と創業年度が記されています。

四百年を超える寝具メーカーですが、その企業理念は「伝統は革新の継続である」だそうです。この理念に忠実だからこそ今でもエアウィーブなど新しい製品を開発し、提供する会社であり続けられるのでしょう。

今後、国際情勢は大きく変わるでしょう。中国や韓国からの圧力も増すかもしれません。

目先の利益を優先した譲歩や従属では解決しないばかりか、問題が大きくなることがハッキリしています。今は私達が勇気を出す番です。

まっとうな生き方で、大きくて美しい花を幾つも咲かせたい。

自衛隊の皆様と私たち国民の繋がりと絆をしっかり活かされたら、必ず先人の苦勞に報い、後人により良き未来を手渡すことが出来ると思うのです。